様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２５１９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2020
課題番号：１６Ｋ０４１８２

研究課題名（和文）自己決定理論に基づく父親の主体的な育児参加を促す保育者の取組みの研究

研究課題名（英文）A Study of Child-Care Givers' Efforts to Encourage Fathers' Autonomous Involvement in Child Care Based on Self-Determination Theory

研究代表者
大内　善広（Yoshihiro, Oouchi）

城西国際大学・福祉総合学部・准教授

研究者番号：００４５４００９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は，父親の主体的な育児参加に影響する要因を分析し，保育所や認定こども園等の保育関連施設におけるどのような保育者の取組みが父親の主体的な育児参加を促すのかについて明らかにすることを目的とした。
まず，主体的な育児参加に関する動機づけについて検討し，Ryan & Deci(2000)の自己決定理論の中の有機的統合理論を基に育児動機づけ尺度を作成した。次に，自律的な育児動機づけを促すための取り組みについて検討し，保育者との信頼関係を感じ，保育者から受容的なコミュニケーションを受けている父親ほど，保育者とのコミュニケーションを積極的に取ろうとし，自律的な育児動機づけが高いことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究によって，父親の育児参加に関する動機づけについて自己決定理論の枠組みで検討しうることが明らかとなり，父親の育児参加を促すための研究に新しい視点を与えることができた。また，自律的な父親の育児動機づけと関連する要因として，配偶者からの促進的なペアレンティングや，保育者との信頼関係および受容的なコミュニケーション等の要因が示された。こうした知見は，父親の育児参加を促すために有効な取り組みについて検討する上での基礎的資料となる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to analyze the factors that influence fathers' autonomous involvement in child-rearing and to clarify what kind of efforts by child-care givers at child-care facilities such as nursery centers and certified centers for early childhood education and care promote fathers' autonomous involvement in child-rearing.
First, we examined the motivation for autonomous child-rearing involvement and developed a child-rearing motivation scale based on the organic integration theory (Ryan & Deci, 2000). Next, we examined efforts to promote autonomous child-rearing motivation, and found that fathers who felt a trusting relationship with their child-care givers and received receptive communication from their child-care givers were more willing to communicate with their child-care givers and had higher autonomous child-rearing motivation.

研究分野：社会福祉学

キーワード：父親　育児動機づけ　保育関連施設　保育者　主体的な育児参加　自己決定理論　夫婦ペアレンディング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

父親の育児参加に関する社会的関心は高まってきており，どのように父親の育児参加を促せば良いかについては重要な課題となっている。父親の育児参加は，例えば母親の育児ストレスやマルトリートメント（不適切な養育）の軽減にも関連があり（大内・野澤・萩原，2014），母親の精神的健康や子どもの健やかな育ちにとって重要であることが指摘されている。父親の育児参加促進に向けた環境の整備も進められ，例えば 2010 年には父親の育児参加促進を目的の一つとした「改正育児・介護休業法」が施行されている。また，寺見・藤本（2013）では，10 年前を比べて父親の性役割意識や育児参加の状況が改善されていることを明らかにしており，父親の育児参加についての社会的認識が浸透しつつある。

父親の育児参加に影響する要因としては，社会学的な観点から，父親の労働時間や夫婦間コミュニケーションなど様々な要因が指摘されている（例えば，佐藤,2013）が，北村ら（1999）の調査では，母親が父親の主体的な育児参加を求めていることが示されている。

父親が主体的に育児参加している時，自己決定理論（Ryan & Deci, 2000）に基づけば，育児参加に関して自己で行動を決めることができると感じられ（自己決定性），うまく育児行動を取ることができていると感じられ（有能性），その結果として母親や子どもと良好な関係が築けていると感じている（関係性）と考えられる。なお，この理論は主に学業場面において取り上げられる理論であり，自己決定性，有能性，関係性の高さが，高い学業成績や精神的健康に繋がることが示され（櫻井, 2012），仕事等の他の場面においても応用されている。しかし，全ての父親がこのような状態で育児に参加しているとは考えられず，例えば母親が主体となり，父親は母親の指示に従って育児を手伝っているような自己決定性の低い状況も想定できる。この背景には，労働で費やす時間が母親等の他の家族よりも父親の方が一般的に多いことも単純に考えられる。以上より，父母あるいは育児に関わる家族での育児に関するコミュニケーションや育児上の役割及び育児に振り分けられる時間的制約が,父親の育児参加に関する自己決定性，有能性，関係性に影響を与え，それが実際の父親の育児行動に繋がるというモデルが想定できる。よって，本研究の第１の目的として，こうした父親の育児参加に関する自己決定性，有能性，関係性が実際の育児参加の状況にどのような影響を与えているのか，また自己決定性，有能性，関係性の違いに影響する要因は何かを，特に母親を中心とする家庭及び労働時間との関係に焦点を当てて明らかにしていく。

こうした父親の主体的な育児参加を促すための要因が明らかとなったとしたら，次にその知見を踏まえて，具体的にどのように父親に対して介入するのかが問題となる。育児のサポート源としては，配偶者の他に祖父母や友人などが挙げられるが，社会的な資源としては，保育所や認定こども園等の保育関連施設が重要であると考えられる。特に，2009 年度から実施された保育所保育指針の改訂で，保護者への支援について新たに章を設けており，保育所の職務として保護者への支援を重視している（厚生労働省,2008）。しかし，保育関連施設の保護者への支援について焦点が当てられているのは主に母親である。例えば，田辺（2014）が父親への支援において父親同士の交流の機会を積極的に提供することの重要性を示しているが，保育関連施設の父親への支援については研究の蓄積が未だに少ないのが現状である。

本研究では，父親への支援の取組みを，父親の自己決定性，有能性，関係性への支援として位置づけることによって，主体的に育児に参加する父親への支援の効果を明らかにする枠組みを与えることができる。本研究の第２の目的として，保育関連施設や保育者の取組みが及ぼす父親の育児参加についての動機づけへの影響を明らかにし，父親支援に有効な取組みとは何かを明らかにしていく。

２．研究の目的

②研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか

本研究では，研究期間内に以下の２点を目的とする。

【目的１】父親の育児参加への動機づけモデルを構築する

父母を対象とした調査によって，父親の育児参加への動機づけに関する自己決定の程度が，実際の育児参加の内容や時間，育児ストレスとどのように関連しているのかを明らかにする。同時に，父親の育児参加への動機づけに関する自己決定に影響する背景要因について，特に母親を中心とする家族や労働時間との関係に焦点を当てて特定する。

【目的２】父親の主体的な育児参加を促す保育者の保護者支援の取り組みについて明らかにする。

上述の父親の育児参加への動機づけモデルに即し，父親の自己決定性，有能性，関係性を媒介変数として設定した上で,父親の育児参加状況を目的変数とした構造方程式モデルを構築し，保育関連施設や保育者のどのような取組みが家族の要因及び時間の要因を制御したうえで父親の自己決定性，有能性，関係性を介して主体的な育児参加を促しているのかを実態調査により明らかにする。その上で，有効な取組みであると特定されたものについて，保育者への介入調査によって，新たに取組みを導入した場合に父親の主体的な育児参加を促しうるのかを検証する。

３．研究の方法
３－１．父親の育児動機づけ尺度の開発
・調査方法
まず，2016 年に未就学児を育児中の父親にインタビューを行い，育児動機づけ尺度に関する項目を収集し，学習意欲に関する動機づけ尺度開発の先行研究の項目と照らし合わせて尺度項目案を作成した。その上で，2019 年 2 月にマクロミル社に依頼しインターネット上で Web 調査を行った。未就学児の子どもがいる，父母子どもが皆同居している家庭という条件でスクリーニングを行い，412 件の有効なペアデータが得られた。また，交差妥当性を検討するために，2020 年 4 月にも，楽天インサイト社に調査を依頼し Web 上にて実施した。2019 年調査と同様の条件でスクリーニングし，300 件のペアデータが得られた。
・調査項目
育児動機づけ尺度　Hayamizu(1997)や西村・河村・櫻井(2011) の学習意欲尺度を参考に，育児に関して「外的調整」「取り入れ的調整」「同一視的調整」「内的調整」に相当すると考えられる項目をそれぞれ 7 項目ずつ，計 28 項目を作成した。「あなたが育児をする理由として，それぞれの文章がどれくらいあてはまりますか。それぞれ，最も自分の考えに近いものをお選び下さい。」という教示文で「1.とてもあてはまる」から「5.全くあてはまらない」の 5 件法にて父親に回答を求めた。
育児自己効力感尺度　育児自己効力感尺度（田坂，2003）14 項目を 6 件法にて父親に尋ねた。育児自己効力感尺度の 3 因子（「子どもへの積極的関わりの自信（6 項目)」,「子どもを安堵させる自信（6 項目)」,「子どもを自己統制させる自信（3 項目)」）の尺度得点を用いた。
夫婦ペアレンティング調整尺度 夫婦ペアレンティング調整尺度（加藤・神谷・黒澤，2014）14 項目を 6 件法にて母親に尋ねた。夫婦ペアレンティング調整尺度の 2 因子（「促進（9 項目)」,「批判（7 項目)」）の尺度得点を用いた。

３－２．父親の自律的な育児動機づけを高める保育者の取り組みの研究
・調査方法
父親の自律的な育児動機づけについて，保育関連施設以外の取り組みの影響を確認するために，調査１として，保育所・幼稚園・認定こども園に 2019 年度以前から第一子を預け，夫婦子が同居している父親 300 名を対象に，楽天インサイトに委託して 2020 年 12 月に Web 調査を実施した。その上で，保育関連施設での取り組みの影響を検討するために，調査２として，保育所・幼稚園・認定こども園に 2019 年度以前から第一子を預け，夫婦子が同居している夫婦 700 組を対象に，楽天インサイトに委託して 2021 年 2 月に Web 調査を実施した。
・調査項目（調査１）
講座・行事への参加状況　(1)子どもが産まれる直前（以下，出生前)，(2)子どもが産まれた後から保育所等に預ける前（以下，出生後-入園前)，(3)保育所等に預けている時期（以下，入園時)，という 3 つの時期において，それぞれ地域の中で実施されている子育て支援に関する講座や保育所等での行事への参加状況について回答を求めた。
育児動機づけ尺度　大内・野澤・萩原(2019，2020)を使用した。外的調整因子，取り入れ的因子，自律的調整因子の 3 因子 26 項目の尺度であり，5 件法にて回答を求めた。出生時から現在にかけての育児動機づけの変化を検討するために，現在の育児動機づけのほかに，出生時の育児動機づけについても回想法にて回答を求めた。
・調査項目（調査２）
育児動機づけ尺度　調査 1 と同様に大内・野澤・萩原(2019，2020)を使用した。
保育者とのコミュニケーション尺度　保育者とのコミュニケーションを取っているかどうかを尋ね，コミュニケーションを取っている場合には，コミュニケーションの内容について中道（2015）を基に作成した 12 項目を 5 件法にて夫婦に尋ねた。
４．研究成果
４－１．父親の育児動機づけ尺度の開発
本研究では，Mplus(Ver. 8. 2; Muthén & Muthén, 1998-2018)を使用し，ESEM の枠組みで分析した。まず，育児意欲尺度 28 項目に対する父親からの回答に関してカテゴリカル因子分析を行った。推定には WLSMV，因子の回転法は oblimin を用いた。因子数は 4 因子を想定していたが，3 因子解から 5 因子解までの結果を検討したところ，解釈可能性から 3 因子解を採択した。各項目の因子負荷量の最大値が.50 に満たない項目を削除して分析をし直した結果，最終的に 25 項目が残り，Table 1 のような結果が得られた。なお，適合度指標は RMSEA=0.093，CFI=0.950 となった。
第 1 因子は全て「外的調整」を想定した項目，第 2 因子はほとんどが「同一視的調整」「内的調整」を想定した項目，第 3 因子は全て「取り入れ的調整」を想定した項目で構成され，それぞれ「外的調整」「自律的調整」「取り入れ的調整」因子とした。各因子の内的整合性を検討するために信頼性係数αを算出したところ，それぞれ.871，.943，.767 であり内的整合性には概ね問題はないと判断できた。
次に，育児意欲尺度の構成概念妥当性を，因子間相関および育児自己効力感尺度，夫婦ペアレンティング調整尺度との相関によって検討した。因子間相関はシンプレックス構造の傾向が

見られ，自己決定理論に基づく自律性に関する連続性を持つ因子構造であると解釈できる。また，同一視的・内的調整因子は夫婦ペアレンティング調整尺度における妻の夫への促進と正の相関，批判と負の相関が見られ，外的調整因子とは真逆の傾向が見られた。このことから，父親の育児参加に対する主体的について今回作成した育児意欲尺度で測定できていると解釈できる。また，同一視的・内的調整因子は自己効力感とも正の相関があった。以上より，作成した尺度の構成概念妥当性についても確認できたと考えられる。

交差妥当性については，2020 年に実施した調査で得られたデータに対して同様の手続きで分析を行い，同様の結果が得られるのかを検討することで確認した。その結果，2019 年調査と同一の育児意欲尺度の因子構造が得られ，構成概念妥当性の指標として用いた育児効力感尺度と夫婦ペアレンティング調整尺度との相関も前回調査に近い結果が得られた。以上より，育児意欲尺度の交差妥当性が検証されたと考えられる。

Table 1　育児意欲尺度のカテゴリカル因子分析結果

項目内容	F1	F2	F3	共通性
07.育児をしないと妻から責められるから	**0.91**	0.00	0.05	0.85
06.育児をしているか妻から見られているから	**0.85**	0.02	0.18	0.81
03.妻から育児をするように言われるから	**0.68**	-0.08	0.17	0.57
05.育児をしないと周囲の人がうるさいから	**0.55**	-0.20	0.39	0.64
18.育児をすることは子どもにとって大切だから	0.21	**0.93**	-0.21	0.80
19.育児をするということは大切なことだから	0.13	**0.92**	-0.23	0.82
24.子どもの成長を見るのが楽しいから	-0.02	**0.86**	-0.10	0.76
21.育児をすることは子どもの成長につながるから	0.04	**0.84**	-0.09	0.69
28.子どものことを知ることが楽しいから	-0.01	**0.83**	-0.02	0.69
23.子どもの役に立つのが嬉しいから	-0.10	**0.82**	0.09	0.74
26.自分が育児をしたいと思うから	-0.25	**0.78**	0.16	0.81
22.育児をすることが楽しいため	-0.24	**0.76**	0.08	0.75
17.育児をすることは自分の成長につながるから	-0.10	**0.76**	0.21	0.68
08.子どもを育てる責任を感じるから	0.26	**0.74**	-0.18	0.50
16.育児をすることは家族にとって有益だから	0.05	**0.70**	0.10	0.50
25.育児が大変であっても遣り甲斐を感じられるから	-0.15	**0.70**	0.24	0.63
20.育児をすることは自分の将来にとって重要だから	-0.04	**0.69**	0.25	0.57
27.育児のことを考えるのが楽しいから	-0.26	**0.69**	0.27	0.70
15.育児ができる人になりたいから	-0.05	**0.65**	0.32	0.57
01.育児をすることは当たり前のようなことだから	0.00	**0.65**	-0.09	0.42
13.周りの人に育児をしている人と思わせたいから	0.31	-0.03	**0.82**	0.88
14.まわりの人に良い親と思われたいから	0.29	-0.02	**0.75**	0.74
09.周囲の人からほめてもらいたいから	0.23	-0.14	**0.68**	0.61
10.育児しないと不安だから	-0.17	0.20	**0.61**	0.43
11.育児をなまける自分が許せないから	-0.15	0.26	**0.56**	0.41

４－２．自律的な育児動機づけを促す保育者の取り組み

・調査１

まず，調査対象者を 3 つの時期における講座や行事への参加の有無によって 2×2×2 の 8 タイプに分類し，その度数を集計した。その結果，入園時にのみ講座や行事に参加した Type2 が 36.7%と最も多く，次いで全ての時期で講座や行事に参加した Type8 が 26.0%，出生前に講座に参加し，その後入園時に講座や行事に参加した Type6 が 25.3%，全ての時期で何も参加していない Type1 が 7.0%と多かった。父親の勤務状況と一週間あたりの就労時間をタイプ別に集計した。結果，全てのタイプで「正規雇用」の割合が最も高く，「週 40～50 時間未満」の就労時間の割合が最も高かった。就労形態や一週間あたりの就労時間について，タイプによる割合の大きな違いは見られなかった。

育児動機づけと講座・行事への参加状況の関係を検討するために，人数が多い上位 4 タイプについて，外的調整因子，取り入れ的調整因子，自律的調整因子の記述統計量を算出した。その上で，因子ごとに，参加タイプ 4 水準（被験者間），育児動機づけの時期（過去-現在）の 2 水準（被験者内）の 2 要因分散分析を行った。分散分析の結果，自律的調整においてタイプの主効果が見られ，全ての時期で講座・行事に参加するタイプは他のタイプと比較して自律的調整が高いことが示された。また，取り入れ的調整・自律的調整において，時期による主効果が見られ，過去から現在にかけて取り入れ的調整は低下し，自律的調整は向上する傾向が示された。参加状況によって育児動機づけの違いがあることは示されたものの，交互作用が有意ではなく，参加状況によって過去から現在にかけて育児動機づけが変化することは示されなかった。イベントや講座・行事に積極的に参加することを促す上では，出生前から自律的な育児動機づけを高めるような取り組みが必要ではないかと考えられる。

次に，出生前，出生後－入園前，入園後の時期における子育て講座等への具体的な内容別の参加状況と参加・不参加理由をタイプ別に集計した。結果，子育て講座等への内容別の参加状況について，Type8 は全ての時期において「子どもの養育に関する育児講座・イベント」の参

加割合が最も高かった。Type6 は，出生前は「子どもの養育に関する育児講座・イベント」の参加割合が最も高かったが，入園後は Type2 と同様に「親子でのレクリエーション」の参加割合が最も高かった。なお，入園後の園行事について，Type2，Type6，Type8 は「運動会」への参加割合が最も高かった。子育て講座等への参加理由について，Type8 は全ての時期において「子どもの育て方や関わり方を知りたかったから」の割合が最も高かった。Type6 は，出生前は「子どもの育て方や関わり方を知りたかったから」の割合が最も高かったが，入園後は Type2 と同様に「子どもとの交流を深めたかったから」の割合が最も高かった。なお，入園後の園行事について，Type8 は「子どもの育て方や関わり方を知りたかったから」の割合が最も高かったが，Type2,Type6 は「子どもの様子を知りたかったから」の割合が最も高かった。子育て講座等への不参加理由について，Type2,Type6,Type8 は全ての時期ならびに入園後の園行事において「子育てに関する講座やイベントの存在を知らなかった」や「時間が取れなかったから」の割合が高かったが，Type1 は全ての時期ならびに入園後の園行事において「自分がわざわざ行かなくても良いと思ったから」の割合が最も高かった。以上から，Type8 の父親は，子どもの育て方や関わり方等の子どもの養育に関心を持っている傾向が示された。また，Type2 や Type6 の父親は，子どもとの交流を深められる講座等に関心を持っている傾向が示された。一方，Type2，Type6，Type8 の父親の不参加理由は，子育て講座等の開催を知らなかった点や，時間が取れなかった点が共通していたが，Type1 の父親は，自身が参加しなくてもよいと捉えている傾向が示された。

・調査２

育児動機づけ尺度,保育者とのコミュニケーション尺度は ESEM の枠組みでカテゴリカル因子分析を行うと同時に，父親の保育者とのコミュニケーションから育児動機づけへの影響を仮定し，また保育者とのコミュニケーションについて父親と母親間で相関を仮定したモデルを分析した。その際，父親と母親で保育者とのコミュニケーション尺度の因子分析は別々に行い，また，コミュニケーションを取っていないと回答した父親についてはダミー変数を用いて分析モデルに組み込んだ。

カテゴリカル因子分析部分の結果については，育児動機づけ尺度は前回調査と同一の因子構造が得られた。一方，保育者とのコミュニケーション尺度は，父親・母親ともに同一の２項目が複数因子にわたり因子負荷量が.350 以上と高かったため,その２項目を除外して再分析した。その結果，父親・母親ともに，受容的コミュニケーション因子５項目，指示的コミュニケーション因子５項目という２因子解が得られた。

最終的な分析結果は Table 2 の通りである。適合度指標は，RMSEA=0.047，CFI=0.975，SRMR=0.040 であり，十分に当てはまりの良い結果となった。父親と保育者とのコミュニケーションから育児動機づけへのパス係数はほぼ全てが有意となり，コミュニケーションなしのダミー変数から外的調整へのパスのみが有意ではなかった。また，父親と母親の間で保育者とのコミュニケーション尺度における同一因子間で高い相関が得られた。

Table 2　分析モデルにおけるパス係数の推定値

	推定値	標準誤差	有意確率
外的調整へのパス			
父親との受容的コミュニケーション	−0.144	0.042	0.001 ＊
父親との指示的コミュニケーション	0.342	0.044	0.000 ＊
コミュニケーションなし	0.083	0.101	0.408
取り入れ的調整(F3)へのパス			
父親との受容的コミュニケーション	−0.131	0.052	0.012 ＊
父親との指示的コミュニケーション	0.580	0.050	0.000 ＊
コミュニケーションなし	−0.548	0.112	0.000 ＊
自律的調整(F2)へのパス			
父親との受容的コミュニケーション	0.486	0.047	0.000 ＊
父親との指示的コミュニケーション	−0.194	0.045	0.000 ＊
コミュニケーションなし	−0.291	0.100	0.004 ＊

＊印は5%水準で有意

以上の結果から，受容的なコミュニケーションは，父親の育児関与への自律的な動機づけを高める傾向が示され，指示的なコミュニケーションは，父親の育児関与への外的な動機づけを高める傾向が示された。また，父親が保育士とコミュニケーションを取っていない場合には，比較的自律的な育児動機づけが低い傾向も示された。なお，保育者とのコミュニケーションについては，母親の回答と相関が高いことから，父親の自律的調整が高い場合に，保育者との受容的なコミュニケーションを取っていると認識されている訳ではなく，実際の保育者の態度が育児動機づけに影響していると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 大内善広・野澤義隆・萩原康仁	４．巻 28
２．論文標題 子育て家庭における父母の就業状況、育児参加状況、ストレスの関係の基礎的検討―育児参加状況に関する父母間の認識のずれに着目して―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 城西国際大学紀要第28巻3号福祉総合学部	６．最初と最後の頁 133-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 大内善広・野澤義隆・萩原康仁
２．発表標題 自己決定理論に基づく父親の育児意欲尺度の作成
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 大内善広・野澤義隆・萩原康仁
２．発表標題 父親の育児意欲尺度における交差妥当性の検討
３．学会等名 日本心理学会第84回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 大内善広・野澤義隆・萩原康仁
２．発表標題 夫婦間での育児参加状況に関する認識のずれと夫婦関係満足度および育児ストレスとの関係
３．学会等名 日本教育心理学会第61回総会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	野澤　義隆 (Nozawa Yoshitaka) (20550859)	東京未来大学・こども心理学部・講師 (32816)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	萩原　康仁 (Hagiwara Yasuhito)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関